

ポーランドの負の記憶



宮川 裕章

ロシアから侵攻を受けるウクライナにも歴史の暗部はある。隣国のポーランドだ。

2月中旬から訪れた同国での取材の目的は、侵攻開始2年後の「支援疲れ」だった。その過程で話を聞いたポーランド人の多くが、ウクライナにまつわる、ある事件について口にした。現在のウクライナ

西部とポーランド東部の一帯で1943〜45年、ウクライナの国家主義者らがポーランド人住民約10万人を殺害した「ボルヒニアの虐殺」だ。第一次大戦後、ウクライナ西部を統治したポーランドへの反感が原因とされ、武器にはおのやなたが使われた。一連の事件は、今なお両国関係にわだかまりを残す。

だが、ポーランド人には、その暗い記憶を上回る負の感情がある。それが、自国への侵略と抑圧を繰り返してきたロシアへの反感だ。

ウクライナ産の安価な農産物の流入に抗議するポーランドの農家も、その大半がウクライナへの支援に賛成する。「ウクライナがロシアに敗れたら、

次はポーランドだ」との意識がある。ポーランド人にとってウクライナ侵攻は、人ごとではないのだ。

ポーランドのドゥダ大統領とウクライナのゼレンスキー大統領は2023年7月、ボルヒニアの虐殺の舞台となったウクライナ西部の都市ルツクを訪れ、犠牲者を追悼した。ゼレンスキー氏は謝罪の言葉を述べなかった。虐殺を主導した国家主義者の指導者、ステパン・バンデラが、多くのウクライナ人にとって、ソビエト共産主義と戦った英雄であるという事情もある。

2人の大統領による追悼は、謝罪を期待した多くのポーランド人を落胆させた。同時に、和解に向けた重要な一歩とも評価された。ゼレンスキー氏は謝罪の代わりに、「ともに歴史を思い、自由を守る」と述べた。ロシアという共通の敵を前に、両国民に団結を呼びかけたのだ。

ボルヒニアの虐殺が残したポーランド人の暗い記憶は、ロシアによる過酷な抑圧の記憶と迫り来る脅威によってかき消される日が来るのだろうか。はたしてそれは、幸福な和解と言えるのだろうか。

冬空の下に広がるポーランドの大地は、どこか悲しい色をたたえているようにみえる。